『日本の不平等
—格差社会の幻想と未来』

大竹文雄　著

日本経済新聞社、2005年5月
306ページ、3360円(税込)

所得格差の拡大などを巡るパズルを解明

〈評者〉太田　清（日本総合研究所主席研究員）

本書は、日本における所得分配、個人間の経済格差の問題を長く研究してきた第一線の労働経済学者による実証分析の集大成である。本書を特徴づけるキーワードを評者なりに探ると、「実態」と「実感」の2つであろう。所得分配・格差に関する「実態」と「実感」を巡るパズルの解明に取り組んでいる。

パズルの1つは、本当に世上言われているように、所得分配は不平等化してきているのかという、「実態」にかかわるパズルである。人口全体でみれば所得格差は拡大しているが、これを様々なグループにブレークダウンしてみると、グループ間の格差も同一グループ内の格差も拡大していないということである。全体での格差拡大の理由がただちには見つからないのだ。著者は人口の高齢化、すなわち年齢別シェアの変化に謎解きのカギがあるという。もともと同一年齢階層内の所得格差は高齢になるほど大きく、人口が高齢化すれば、格差が大きなグループのシェアが高まるため、全体としてみた格差が拡大することになるからである。一方、個々人からみれば、同じ年代の間などでは格差は拡大していないのだから、その点からは不平等が増しているとは感じさせにくいのではないか。全体での不平等化の多くはそのような意味でみせかけにすぎないという。

著者の発見したこの事実の政策的意味合いは小さくない。再分配政策のあり方にかかわるからだ。例えば、政府の税制改革の議論（累進税率等）にも影響を与えたとみられる。評者自身も長い間公務員であったが、本書の基になった論文は、分配問題を考察する上で大変参考になるものであった。

一方、不平等感は高まっている。上述のように不平等感が高まるような現象が起きていないのに、何故多くの人が不平等化していると感じているのか。この「実態」と「実感」のかい離もパズルである。著者は、消費水準における格差の分析から、予想される将来の所得を含めた生涯所得では格差が拡大しているのではないかとする。また、このパズルの解明のほか、再分配政策に対する意識などを分析するため、著者は独自のアンケート調査を行い、やはり将来の所得の予想が重要であるとしている。

本書は、所得分配・格差について、人口の変化というメガトレンドとのかかわりだけでなく、グローバル化、IT（情報技術）化などの技術変化、労働市場の変化といった経済社会のメガトレンドとのかかわりを広くとり上げている。また、そもそも富や所得をどのように分配するかは、社会のあり方として極めて重要な問題である。日本社会の将来を展望し、そのあり方を考えている人に薦めたい書である。

おおたけ　ふみお
大阪大学社会経済研究所教授。1983年京都大学経済学部卒、85年大阪大学大学院経済学研究科博士前期課程修了。経済学博士。61年生まれ。